羽黒
月山
湯殿

三山雅集 上

縁起事跡
詩歌連俳

911.3
サ
上

三山雅集序

夫佛種従縁起とハ吾宗ニ於法する事ニして其宗の宗也
神乃法事(ミコト)にハ古ぬを捨まてず御佛となすも事故ニ
孫爲る是善因乃よりて来る事哉志しけ出る是也
于茲三山事ハ實権現乃霊威ニ而萬歳已往の舊跡也
宮祠寺院の規模書ニ秘し傳る記せるこの若干なり
然以ても土地方纔ニ去を隔の邊境なるニ息(イコ)ふ遊ぶこの旆
ふしてむかしく世ニ志ゆられば韞匵(ウンテウ)而蔵(カクル)也志ての傍ニ山下
乃驗者巣雲崖呂茄あまねく國原(クニハラ)哉めぐり武陵乃雅士
まて哉慕ひ廣前(ヒロマヘ)奉納の句ゝを拾ひ中ニ満る古き葉ハ
集ゐんかり梵河の貴こき流哉登りまくて山谿の石辭を

ゆゑかくして画書なしめいさゝか今乃詩歌耳目ゐちかき
我虫つくね子らの艸房にこもりて是が序なきのしんや
はやしと抹らこのなる事く謀られなるもの巻をも開すること
寔とり往昔よわ秘しおへる中に千百が一つ微の中乃微
これも大抵等閑にしぬ事にもふしすとらし文繁撮要ハ
ゐゆ理婦わの袖まして見えやほくのうむを思ふての此へ也いふの
あとなき傳へもんたちわ童蒙の目にも見しらしむることを
いひ傳れハ翁この日或ハ年代の怪なしとせずる傳を由来考
あるじいふやうし云傳れいいでや神威乃貴我去りこの山乃志
我伏をふ者豈敢て年數をかぞへわ信ずべき我信ぜば将信
ざらふを信ぜざらんや一寺ひとし歩我運をの山嶽の

於現在靈光視聽ふぬらて不誰の信不偽をぶらむや
歴代乃形すよあつわ人情の辟固我りてその事をいそ
蓋君子は恥傳やよなわ故曰愛而知其悪悪而知其善なれば
あ猶らは幼學やいかれをと初め瓦礫は一句夜光よなら
入事ゆのぞ堪能乃人傳目り肝腹ゆうう得れとも又道
あるべは一鼻ありあし理い笑ひよきいよく褒誹ともよもを
て善ふ入の謗ゆなしとは邪乃されざるハ後の識者を待
予の見聞ゆる三州四州をよる我往詣者は小補を接
よぶ云ふく三山雅集と題するの名ゆるよふくしるす
おそれ稍まて彼中もとは名我耳ふしをぬれ漸ゆ
運よ乃倉をし得ふしおく讃佛乗乃善因ともなれ

りしかバ僮僕立出て残星乃鼎あり荒澤の下流
を汲て後夜扎がてり酒田乃扉茶烘沸して一碗二碗
り及べバ惟二人兩腋可清風の生ふるをまのゝ覚えぬ

荒澤　野衲東水書

三山雅集巻上

寂上河　附白糸滝

此國に聞えたる大河にして源ハ會津根より漲り出てごてんを隼みかせといひけり難所は多く山形は城外を廻り板敷乃山闇を抱きて家流とまりて名たる事いへるにもあらし果ハ酒田の湊に落り稲ほにつまれ船あまたのぼるとくだり行やうにてなんといへば稲舟のかるきかたこの月ばかりと詠れしぞ古き文にも書傳へけれ

古今集大歌所御哥

寂上川のぼれはくたる稲舟のいなにはあらすこの月はかり

後撰戀四　三條右大臣

もがみ川深きにもあらで稲舟の心かろくも帰るなるかな

千載雜下長歌　俊頼朝臣

最上川瀬々の岩かど湧かへり　下略

續後撰釈教 十戒中 自賛毀他　寂念法師

もがみ河人をくだせば稲舟のかへりて沈む物とこそきけ

續古今冬　前内大臣

いな舟もしばしはひきとむ最上川こほりし沖の河あさきかな

夫木集　雅經

もがみ川瀬におりしいな舟ののぼりかねてぞ岸の　季御

新後撰雜中　藤原嗣房

いな舟のしのぼりのぼる最上川しばしといへど日を經ぬるかな

續千載夏　前関白太政大臣

最上河けふさみだれてみなかみはしらずもわたしなぬ宿の船

續後拾遺雜中　後京

もがみ河瀬々にせかるゝ稲舟のしばしぞとふ小思ひましのい

新千載戀二　鴨祐夏

もがみ川しばしと思ふにいな舟のさしもかへらぬ身のうきぞ

同上　藤原相如

いなしくもあるまじかりなもがみ川しばしのいねとみつれど

新拾遺戀二　有家

最上川人の心のいな舟もしばしとさらばさゝめん

新後拾遺　　後鳥羽院下野

最上川いなとしもなく稲舟のしはし計そ心なるとも

同上　　道因法師

もかみ河のぼりもやらぬ稲舟のあつかふべきは程ぞ久しき

貞享の比かとよ羽黒山別当会覚を尋ねて入院の

折ふし山の寺まで　　僧正澄海

いな舟のかゝりてもこそ最上川の所は安き世の中しらすと

稲舟は渋る水に流されてのぼりかねるを見てもかみ川かな

最上川さく稲ぶねも見ん絵よ巴のよし川　　貞徳

奥羽行脚の比

さみだれをあつめてすゞし最上川　　芭蕉

川音はかまん繁さを神戸と見ゆる所　　共角

禅しずか世の中よりの後宮のし川　　京　惟然

かしこさを胡坐の顔の櫂はらひ　　浮生

星落ちて底より茂かはこの渡　　出雲　風水

何ぞ見ぬ川の晴りりかゝ舟の影　　七人　呂丸

影ちきや鮎ともはしる道者舟　　酒田　覚左

代垢離や幣に移れるもとし川　　今　桂谷

氷の形に蓑の装ひや最上河　　今　茂伴

涼しさの舟のりになりてもかゝんこのは　　鶴岡　且松

稲舟も馬積めてし浮流かれ　　羽黒　此紅

蜷貝の名は結ばれて米屑こそ所　　今　東水

梢きひらく蔦なりけるも寂し山風 今山風

初鮭や梢は落る鯖(コナゴ) ふる雨 今 呂茄

寂しさ門をくされど右の断岸千丈あり是に緑樹の梢は
もみぢより白く瀧りて見ゆるは白糸の瀧なり此河の
上下まさに此瀬たぐひ滝なりて四十八瀬とや傍にいはゆる
源義経越後より此所を過りける時此のみちのくへ越るを
なる所まて此瀧をあふぐ供の奥しるけるも女房の
よみける哥あり

寂しさ門瀬々の此白糸の子なれは末まて無る白糸の滝

白糸の瀬やうつるもとこらてさん 桃隣

散りて楽る瀬の糸やたぐひ滝 七人 柳風

清河 附五所王子

庄内領地此鶴谷(カニサハ)より五つ乃村にて此所に人の探鞠(アヒ)使(ケ)をしける所関門を
立へら送りける也今も城主より此所をまもらせ住む是は
路る也 瀧(タキ)中より流るゝ風春の桜はあらそひまとけし
それは譲(コトガ)り清河とも名付り

こさふ門や裸あちらの 道の辺寺 岩形 桃陽

郭公根鋪越へと庵はうちそと 羽黒 東水

村のもとり小さき宮地あり是する所五所王子なり
それらを義経下向の時大弓箭前太刀鐙等を此にしるす
奉納をり今も玉門ゝ累(ルイ)代の什(ジウ)物(モツ)とせり

鶴殺せり鐙が轡箱なき名乃花 呂茄

是より狩川といふ所より清河まての駅路にして
むかしハ清川とよへるよし三ヶ沢添津なといふ村はつれ
添川村より出る所添川とし、道へ加茂寺と号して羽
黒八千余坊の中なりける寺ちかん三句館といふ坂の
跡ありと句の事末ニ記ス

佛名(ブツナ)坂

坂より右のかたにありけるに薬師堂あり今
ハ手向(タウゲ)といふ町をつくりて坂をそのかたへこせの佛名
と唱へなしけるとやその名ゆかし

衣裏の月扇に移るや小川坂　羽黒　独歩

夏来ても蚊の付残く蝶背とや　今　梨水

此門は坂本より佛名信実の清浄ばかり建立也
なりかはりやすべて此道は秘密山澤梧棲のれぜんみえ
樹廻り坐なども云奮而跡遂一ふたる也

五輪森

風輪てん希より来るや穂屋のいろ　此紅
行ればむ門うしや路れしほ　呂筎

前坂

此坂をとりてみ向は町へ入れば村ちる路
難なる人家あり

名所は流まとなやもり門と至より膝　宗因
佰種ちて藝より有明　すちち配　江戸　凍雲

菰すゞれ貪り煩ふ蚊やかりかり　江戸 仙化

上件所〻従寂上趣于羽黒山路筋也

鶴ヶ岡

是よりハ又越後路を経て羽黒へ趣くの道筋なれば
酒井左衛門尉城下也古より領主ふして城中郭外武
家やしき并ニ工商の家々懐恵ますくさえれバ
絃歌の嘔唖する市人の言語繁く聞えして盛月
此城下乃内七日町といへる処旅人の驛舎なりとの
西あつく入判をあらためて山への近道とするの羽黒へ
おもむく處し

梵字河

城下を出て行き〻川あり往昔湯殿山の流
より弥陀大日観音乃種字この川に流れ下りしに
よりて今にその名を流布して梵字のきえしりし
川辺を鳥居川原といふ是よりむかふ羽黒一乃華表
ありけるよし。

結ぶ手の雫も清し　梵字川　助叟
ちりかゝる柳や捨る梵字とも　一蜂
燕の影しそれ折り梵字河　江戸 倫々
藻乃花り魚尾も露に梵字川　今 倫芦
青柳や色は流れが名のりよる　山形 窓梛
蛙まて阿吽おさめれかんし川　米沢 九〻

清さよ此遊魚や夜拾保むし河　苔水

いつより閑居御とゆいし八ふうし川乃事しるし

歓きゞばそれ不すぶ立て榜縄ヿ　東水

水れわる宗れ汲も枕字うる　李中

きめよえば三角稲もし巳　可菊　呂茄

今川

川をわたり向ひ今川といふ所あり青谷川此湖主とく何がの事を言ふらい人営ありて羽黒信御しむ能除太子より帰依せらる西南乃方より母将山金峰山尺中なる赤川村松尾村布施祠貴などいふ羽黒より由緒あるほとりに此方を酒田袖浦乃眺望をあつむる海山

やどりすまうにて

鄒かし馬ハ液ねとし薮此筆　浮生

喰ねもしありや松尾此栖園　雲　惟然

流れ漏る此名乃うまふ菊乃森れ　呂茄

酒田并袖浦

酒田みなと亀ケ崎といふ所代ありて此城主の領内にして此所まで一港あり西國京運送此所にて通ふる湊にして萬戸摩く且暮乃賑ひなることは別にて海濱乃袖乃浦あり

拾遺集

よみ人しらす

君か世の浅乃序袖の浦は宮浮草とて侍ぞしれべ

金葉雑上　平康貞女

なかぬるも霞乃しほりぞかゝらんに袖の浦まで人のぬれける

新古今雑上　中務

袖の浦乃波ふきかへす秋風に雲の上まで涼しからなん

新勅撰恋四　前関白

しかも思ふ猶うらみつゝ袖の浦ひとり衣ほし波やたつらん

同上　侍従

わすれぬ置れの跡としなりぬ露や我らぬるゝ袖の浦波

続後撰恋二　藤原道憲

君恋ふる涙の海と成ぬれて見るめはからぬ袖乃うらかな

続古今恋一　参議雅経

のふまりや人のかゝりし心をおもひ川浪かけてしほるゝ袖の浦風

続拾遺恋五　常盤井入道

あけのみよ袖乃しほ波立かへり色かはりゆく人の契やかはりけり

新後撰恋一　祝部成茂

袖の浦せん涙の江乃ふかくしもうらみやいかで恨る人

同恋四　高階宗成

忘れなきありしに帰る浪ならはまたかけしかる袖の浦浪

続千載旅　祝部成賢

みるめかり塩やくとても海人乃袖ほしかぬる袖の浦をぞ

同恋一　三条入道内大臣

流れゆく涙さへ忍びしまれかる見るめなき人にしれる袖の浦浪

同恋二　前大蔵雅有

あはれなれと袖のしるしてみん恋わたるにさへにそかゝれつゝ

同上　為道朝臣

あふせてや恋わたる身はいつまてか朝夕な波こそ袖のかはくとし

同上　従二位親子

しらすたゝ袖の浦浪かけてたに人をこひわたる身はわかならねとそ

同恋四　亀山院御製

年月のあはぬはかりかさめてしほるゝ袖のうき涙

新千載秋　藤原宗泰

藻塩くむ袖のうら風さえぬれはおなしうき世や衣うつらん

同恋二　権大納言公忠

しらせはやうき初かりのみるなみたとそかゝる袖の浦なると

新拾遺旅　法印源意

ふねとめし行方も袖の浦風にまたよる波の枕かはさく

同恋二　為兼

思ひわひぬる身は今夜の枕のみしほ干にしらぬ袖の涙

新後拾遺春上　御製

春おほね霞の衣きさらきの雨にしほるゝ袖のうら浪

同恋二

恋わたる沢のみるめもなきたえぬ袖のひるまもなきそかなしき

よそにしられん

同上　正三位知家

暁の別はいはてかゝる衣ぬれてそかゝる袖のうらなみ

新続古今恋一　洞院摂政左大臣

思ひわひよ涙干しもあへぬ波乃音にさへ朽はてぬる袖乃うら風

同恋二　源家長

美なふしに見る月かけしなくて時こそ恋しき袖の浦浪

同四　按察使資明

立帰りまた藻塩をかくほとそ今も別てし海の袖乃うら浪

同五　平忠房

逢衣いつもみるめの塩くまぬ身ならでぬるゝ袖乃浦波

同上　進子内親王

海人ゆかん玉藻かりほすを袖乃うへに乾く間もなくぬれぬ波のよるよる

同上　一条前太政大臣

之のふ身ハ涙乃底にかくしつゝ我のミ知る袖のうらなみ

同雑上　権大納言経豊

あま人の衣かさねとしほる雲まん浪まれにかゝる袖の浦浪

名所百首の中に恋　法印季吟

恋貫いろ手も忘れぬに立帰り又かけそふる袖乃うら浪

日ぐれ路ハしほのねに濡れし旅衣たゝ浦かせ袖の浦　不清

きのふけふ遊行人は雨にぬれつゝ

かくしつる藻塩乃煙わひぬる人に知らせん袖乃うら人

遠望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉

果なき見ゆ海より入や最上川　今

海上より雲を掃して月涼し　沾洲

出て見れハ月も雨乃節も涼し　惟然

紹巴まで袖としほりし酒の月　呂丸

夕されや笠より深く袖乃空　尾花沢 清風

鳥海山

此山鎮坐(チンザ)の神一記ニて大物主神社とも祭りその外
山田乃事ハ實舊記未審(ツマビラカナラズ)所覧ニまかしく至の康平
年中宗廷ハ昆那の名音ノ有ト云同宗(メウ)壬夏年の十月海不
三郎けふしをまて旅ゆうてや雉が峰にも
乃如くなる富士乃姿ほと九姿の丁寧と残雪班駁(ハンバク)
あり天り雪乃中ゆしても二のまなるいかなれ
岌嶽(キウギ)也ゑんらの識之(ヲ)

時しらぬ山まで葛乃根こほり餅　浮生

雪の鶴の雛し花なりきさの海　風水

鳥乃海なれバ打寄る鯨あり　酒田 不玉

象海やきさ見の蜑のあまり際　鶴岡 重行

陽炎や果も往しゆく山かな　羽黒 東水

雷の須臾咽合(ツイヒ)や舟乃宮天　武仙

琉璃光乃宮ふ不盡なし雲の山　呂船

象潟

き海山を越へまかれど象潟なり能因法師が出羽の國
西行上人乃老木の桜九十九の嶋八十八ちん潟のれもち
にまさる詞のこさバ筆かり花の此景色をそへさんとて此國
乃名所どもとらんなれバ席(ツイデ)を移く跡をもとむ記(シルシ)をつく神功
皇后の陵(ミサヽギ)とてあり寺ハ干満珠寺といふ所りそれ
縁由ゆかし

後拾遺旅　能因法師
世の中ハかくても経けり象潟の蜑の苫屋を我宿にして

新古今旅　顕仲朝臣
[illegible]

西行法師
きさ潟の桜ハ浪にうつもれて花のうへこく蜑のつり船

けふ[illegible]の行脚よ　遊行上人
おのつから見えし[illegible]象潟の蜑の苫屋小松風そ
江山水陸縦横一里ばかりにして俤松嶋にかよひて又異
なり松嶋ハ笑ふがごとく象潟ハうらむがごとし寂(サビ)しさに
悲(カナ)しみを加へて地勢魂をなやますに似たり浪
乃立入る所を汐越といふ

きさ潟乃月や流人[illegible]けふ　澤庵
象潟や雨や西施(セイシ)が合歓(ネム)の花　芭蕉
汐越や鶴脛ぬれて海すゞし　仝

旅寝せし月見蛤小松ぶり　一晶

西行桜木陰は小笠捨てけり　三千風

鶴の孫来て見たさ野乃海　山夕

浪越わたりあらくや雎鳩(ミサゴ)の巣　曾良

簾粟(ミヽロ)ごとく閑居を移りけれいあちぶり　凍雲

水や沈しと峯乃生絹(スヽシ)打ちろげ　呂丸

蛸浮や鴨の嘴わくらもどかりて　亡人 則堂

こさ所のくや猶は三方乃尻をおとて　狩川 呉柳

蛸浮や首所出をを庭れ蚊屋　清風

静けさよ所こうて嘗(ナメ)汐乃あし　東水

[illegible]　呂沾

八乙女浦　附熱海(アツミ)

是海より蛸浮乃績こさやそのう羽黒権現此所より瑞光を輝(カヽヤ)かし山頂より穂りまし則海中に小石あり鳥居あり今に玉川くこれ月より文月のけくく星河さいやうれるをその沖より龍灯あらはれ出るまで夫より身拝つゝ文海よって蔵くその光波をかゞ所不思議豈(アニ)凡察に及ばんやまたこれ修験入峯乃時[illegible]羽黒山より遥(ヨウ)拝の霊地なり

八雲より川娘は去うて菜乃葉に与那　清風

笠寺より汐路や取る八朔(ヤタ)れ月　東水

是より南は磯を知れとも熱海(アツミ)といへる一邑あり小海が

近しくいへども土耳く草闇かくしくし海れ出より溫泉
湧出て諸病を治るを荀り奥羽両國れ老少の遊賞
乃往境なり

蓼郡といへる海辺れ村の名　　仕口（伏見）

湯の原より蓮沼代にかくて坂やりかる　　鶴里（江戸）

右酒田鳥海八乙女浦等記途中遠望也

荒河

是は往還乃路筋なり川を渡りて小高き森あり金
沢宮といふ青奥州秀衡病死のうち家嫡泰衡従
頼朝命ニ殺義経於衣河舘ニ頼朝又攻泰衡正不臣ニ
将卿[illegible]武士の[illegible]
しくれあらん生を書し一社を祠られたりとなん

人や住んでまり

まて乙女や男をか投しうかし　　東潮

結ぶつまもあかうや寒や木の葉の杼　　久武（羽黒）

是より荼川なといへる村ある野荒町といふ村へ出る右の
方ニ玉川村といへるあり寺ありて玉川寺といふ古へハ羽黒
領地にして玉泉寺なりしが天台山の流を汲み
すく足ありけるにや今は禅家の法窟となりて
宝物なと今は少なし

神路坂

松の木[illegible]通りより[illegible]向の町より入るものを神

此山之現坐所しけるおりしも此下より〜せ給ふ〜
り、名づけ給ふとし中條色より
山伏かり鼻ヶ滝千てヽ尾谷の肌　東湖
入門や左右左高み登ろ〜ろ　羽黒　天立
一歩進高神地坡　瞻望絶頂若盈科　令　南枝
松風長入路人秋　洒掃尤情思不他　令
松涼しさ〜〜千〜や〜る　令
山乃序成〜やあやどる松乃〜れ　令　白藤

中ノ坂

坂乃〜〜〜り立石あり辨慶の礫石とし中條〜心
あり此中〜〜〜山也〜〜し八の〜る〜

あし玉乃んゆうし

赤坂

薬師堂あり前ハ佛名坂とそ〜るよし
赤坂やむらし〜乃山さへ〜ろ　庄内　定頼
衣ヶ門ま〜多し十二神　令　李山

念佛堂

称名山蓮臺寺と号し武陵此人あ〜〜の〜〜〜
修行して〜〜〜念佛の一字を造建し今〜〜
信心帰依の者缘して六時不退乃道場となりの境内
あ〜〜乃墳墓ある中より藤原氏元應二年三月乃〜
あり　後醍醐帝の年号なり　苔むしたる石塔いのある人〜〜〜

ゆかし

茶臼はいまゝとのし柿尾すゞ哉　山形　幽窓

滑河（ナメリ）

念佛堂よりわかれて町並也　此處を八日町と云此町
中を流るゝをなめり川と云金剛水の末なり

娑婆や合掌をして先をむけ山　羽黒　薫堂

戯ふるゝ叢山ふしやのりせん宿　尾花沢　尭介

渦叢の底りみやげやかゝつゝ　直水

金剛水

金剛樹院乃境内なりけれ寺ゝ今三十余坊の内にして
本寺ハ[illegible]方十間
かしして異験の僧侶住持あり今に来迎が池といへる此
色となりされば此清水を貴み名つけて乃修学の初金剛
堅固乃かおもにせんがくめでたき名水を湛へられん
炎熱のおりよう人の煩ふるをこもふの水は用ゐれば験を
得る事今に時々なり

中旬館

むかし羽黒八千余坊ありける時年中の行事
繁多にして寺務三人をもつて一箇月乃うち上旬中
旬下旬それぞれひとつれぞ是を三旬としその長臣をおき
此所は中旬なる人住みけれゆへ中旬館といふとぞ其記を
添ゆ村上旬と錣例えて可知

當山往古ハ衆徒中山伏多く居住し修験社家ともに
七千軒余ありしが故ありて徒党蜂起し鎌倉執権へ
訴へのりし許へ悪事停止ありて國民ゆたかなりけるとそ
それ法寂明寺時頼円爾氏ニ此山本堂を建始め
三ケ年逗り給ふよし古記にあり徳川家御府のゝち
當宮の探題とし梅津中将殿を被下置中将殿男子二人
あり當山長吏職を被補一ケ月ハ十日宛かはり仕へしを
ニ被仰て上中下旬といふ上旬家老大田氏中旬家
老三澤氏神林氏下旬ハ真田氏吉住氏小関氏
なり下旬ハ家近代まであり其後法常善坊と
云し人是なり

的場小路

町乃内小路の小路あり毎年九月九日鶴岡城主より奉行人等易く流鏑馬此神事ありよつて記を的村あれ此庵ふさあん乃騎馬乃知を村なり松尾として神領の内村くより流鏑馬料を賜ひ出せる故実なり

池中

此所むかしハ醫王山棲霞寺と号して五百坊ば(?)頭しあり今ハ修験在家等軒を並べ石の橋あり當山前住持天宥法印彫刻(テウコク)の芒(?)ケ文あり

雷電石

いま庵雷電明善薩尾当(アガ)ところなりけるを(?)

この石今に於て人家の背戸にあり不浄に觸る
時ハ其人たちまち病となるゆゑにものを雷電石
水といふありむかし乃閼伽(アカ)水なりといふ今はなし

石坂

是はやかて住吉の人馬よりかゝ(ガ)る坂なり十町ばかりある道
右の方ハ高き山より上は下居山中禅寺といふ寺の音に
境乃境地なりけるとぞや是より山上なる古来ミえ雅
ありける坂なりといへる故ある事なり奇特なる哉

引攝堂

引攝の弥陀如来慈覚大師乃御作なり是より堂社
多くありして一こゝに擧(アゲ)がたし依て同じく大日など云
奇特なる事あれども繁ければこゝに略す

黄金(コガネ)堂

應化堂ともいふ三十三躯(ク)乃観音いまし貴くまします
しまた則羽黒権現三十三の應化身をまつりて
中将ん草創は清れ乃時なりや中来(ナカゴ)武将頼朝卿
羽黒修造ありけり土肥次郎時の奉行となりけり
しての影像今にこの堂にありて像の裏に漆書
土肥次郎實平とあり稲岡村といふ所にも塚あり
今にありて表示しと生涯を終りけるとかや
文禄年中再修補後守景次ことに此堂を再興すといふ
むかしハ堂のおもて惣輪蔵なりけれどもいまハ堂の後に天神

松ともに周圍三かゐ程にて二つ侯ひにかれ枝をふるひ
ありしをきけるに五十年あまりさきにその木枯てそく
みなしまひらん根だにさへなくなりけるとぞ

花さかれ露は濁るか　馨の音　天立

流季しいうじ法法の金残光　李山

あおの時ゞ茲まし空かれ金　夜鳥　呂茄

観音堂

十一面観音なりむかし能主として下總國香取郡福田村
伊能氏何某といふ者ありしに年法二比法山信し
けるにさつし法関東疫癘の妖孽ありけるにその者乃
家にも一月二日の朝より牛三疋ならびて主いと悲しみ
愚ひなれともいゝ色にかなしみ給ひけり寒ひなるに盛夜
との形よる牛あるはれ草をくらふくるいとかなし
なげくうちに疫氣さり癈れける牛ともこそ妖にあへなり
志りしが其後一家乃内も色にちりしも疫神の難は
おそれはまぬかれしかばかりかたく信せしも
三乃山の霊感を貴とみ今にいたりて益さあふめあひ奉
畏の感と信仰ませくし唱仰乃心淺からぬは観音
をも奉納し丹誠追月厚く神威尽る限りそれなし
追年の事かゝ此堂の建立をかなし寳を記で
まつらせり伊能氏さいかなる身ゆゑりかんた彦子
亡是此追福とて依田氏同く奉附されたり

大宅三重乃塔ハ寺寺ふう山本
いうるうお同とう

荷る悟し二門乃東まのつ〻れ芯　東水

蝦夷下舘

むかね堂れうしろ乃鐘のゆかり往昔蝦夷人は亟り
来り住けるれ古の亟り不動石といふ石あり来降し
給けるとしや伝ふ

舘や守れ鶴となりてむせびけり　東水

釜清水

むかし大象舎席の柳再ひる大釜とて中比湯で
二門の釜ありけり一門る此池中へ沼て埋ミひ
あかりきを今一門いむかしの堂れ跡あり釜堂といふれなり

日てり障害との芹乃かしみの乳　鶴里

蔵ちくや燦らし錦ふ浪れ　鹿　久武

正善院

黄金堂の別當なり是より三十余院のそれ法門
以ちより御堂と云所へ住居でお碇印く院蔵を
辞し林下の幽閑れ守住深く年代耳なりひろ〻脈
個りぬりくろ呂丸英士が風義と集りく白く
秀よりし小五とせありきてけりて身偽ありくる吟な
乃变まれかりて存命れ一両句度々ずりまた高偉る

やゝろく寝酔るや房れ帰るあり　即堂

水音れそろうまと暮さり　杜乃

病牀吟

昼は蚊も小ばしらもなし枕もと

辞世

水に月や今ぞはるゝ胸の雲

下居宮 附 謝併

二王門より奥にあり此宮より左にあり社記
曰毎歳九月晦日三山権現下山十月朔日神事于出雲
州大社同晦日帰座至十一月九日下居此宮となり祭
今に至りて年々中冬九日湯の花の神事あり一年
吉凶此神託あり則天下国家山上山下の吉禍を
託宣し給ふ昔は山の執行職十月一日月星宿に
より九日此神託事畢て山に登り寒す諸社の
法施一所に云ふがごとし

押付て今も行よ法汗やいさぎ　羽黒 幸信

海もとし神をも押し流しけり　此紅

桜より桐やおりも花ものちの　李山

向木舗り康静なり　付採く　呂茄

大黒堂

人皇五十一代平城帝の御宇大同三年静保
配流ありて此国に来り給ひける時弘法大師の作
の大黒天の尊像を安置し給ひけり今の堂の傍に大黒
桜とて大きなる一樹あり小ざくら桜果あり

咒小肥ゝく此ゝり孫養ふ宗なや　李山

桃清水

大僧正行尊ハ此山にて入定の時近里悪病ハ悩く
ある小行尊ねりの桃實ハ水ハ杓し付水ふそく太
きん行へと病よりすいり念じなりかしてのなげ行り
とかり

桃清水の流をうつてわ世ハ萬凉し　羽黒　安心

行尊塚

みより南の方かり安養山といふ山ありわり柳ホ此終
の事ハ三井圓滿院ハ碩學ふして白河院法宗御他
ハり異ハよなきんあつく靈驗高徳舉ハく尚ハかへし傳記
の繁ハ手より出りく畧記ある事此也

系圖

三条院ー小一條院ー源基平 従三位号 御子宰相 ー行尊

又白河院之猶子となりす十二歳ふしく薙髪し三井の
明行よ随ふ十七歳ふして峯入難行を勤むそれより
驗者ハ名高く永久四年補園城長吏保安四年任
僧寺ノ座主長承三年勅為家僧之上座居于三井年
等院にて終りふそのゝ終り給ふ不詳終ふしてそそ
法國拝樹の法ハ此山ふ於し錫ハ掛行ハ當寺に在
修行ハ成なりのハ法ありて此下に身体ハりかれいあるへし
一門ハ古墳今ふ於りく寛永の法樣くり修行あるの家得

持經院心にかゝる衣を着てかくさし塚の中に一つの金
札あつく納る所大峯修行の時よりありけるとかや
もとより最上おりへ山稀の歌の金札ありしとかや
とふらひ見れはかくの如く成てしこゝにあり
此塘の上稲荷大明神を祠るハ最上家の守りなり
あまるつゝ我趾止まりて六百年已往今にいたりて感涙袖を
ぬらすものなり

龍膽もあはれなりけりいざ知らず　惟然

藤蘿の花もおりへ稀の実　風水

涼しさや雲の峯　羽黒 峯月

極楽の雪や拝殿の山ゆりかな　令 千露

ゆけありて願ひ開いて金風茶　令 了枝

ふけ出て吟しおさめし稀にあれ　令 東洞

諸の塚にもまだ若葉の色　羽黒 柳也

實方の跡も稀にも名もしれど　藤嶋 立宇

霧の中久米路の橋も天の中　呂笳

峯の薬師

ある堂ハ當山入峯修行の時修験行列繞堂の
まうでて拝みてまはる也と云

野も山も茂りて流璃の世界かな　岩城領主 風虎

みけ出の露ある雨さしの風せ風　浮生

荒町

此町むかしハ學頭屋しきなりそれゆへ福尚寺傳心
あるかしハ太守ハ寺地なりけるを今此町の内へ
嶋原より石あり町内の鎮守として
毎年當山禅定の初をゆるし一寸四方ありしむ
搗餅ハ道者の為ふ事おりしきなおうら山家の形
容をつ似合ふうる旅客名物と賞翫せしなり

執行清水

海町と云所にありそれ流れ星澤と云往来の傍也

烏崎

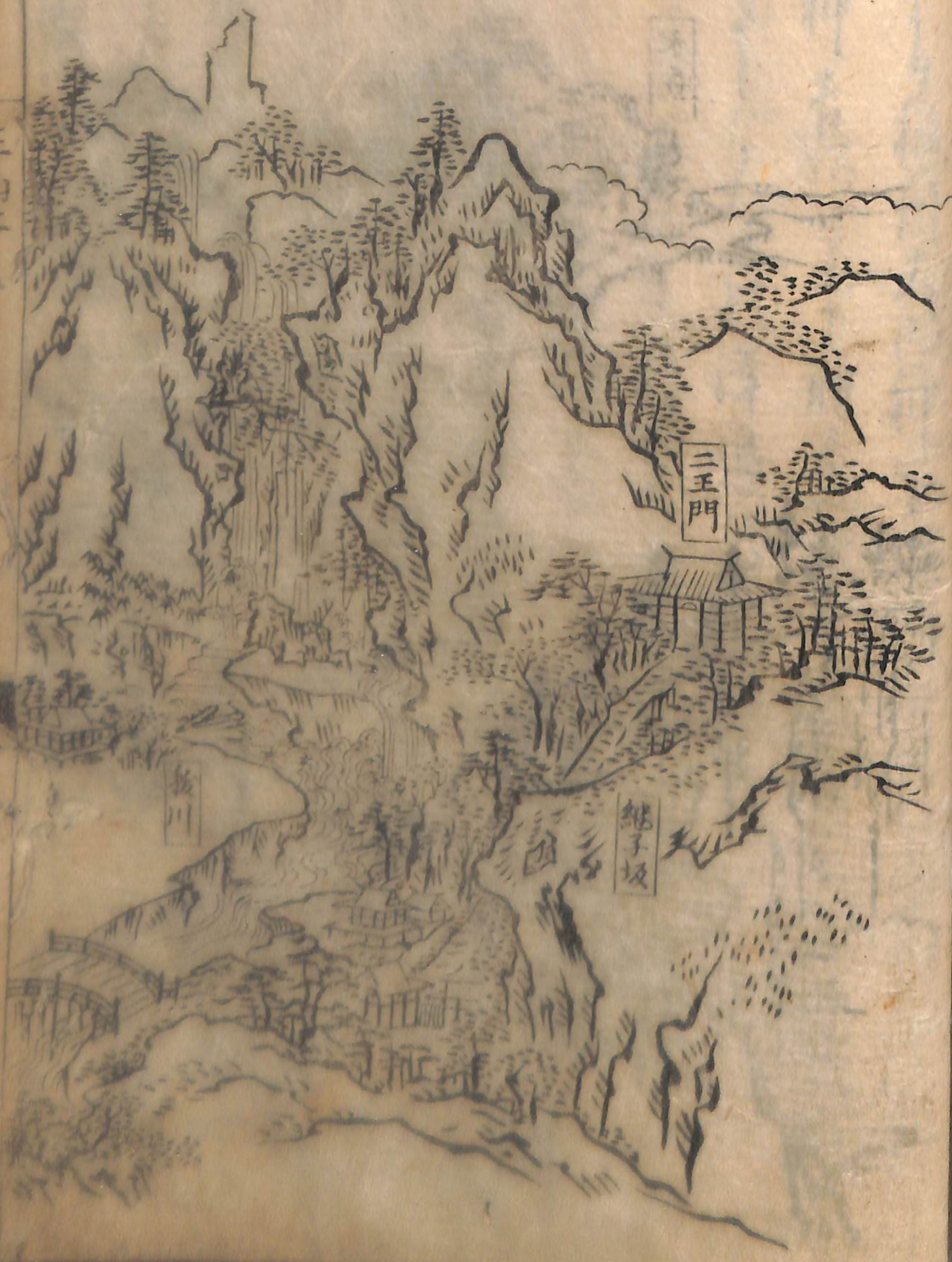
舊記ニ云能除太子至羽峰ニ時樹陰深鬱而殆迷岐路ニ
時有翅八尺靈烏二足來テ導キ能除ニ臻ル羽黒及月山等ニ至ル

太子歡然而歌曰
彌也喜茂禮遠能我播倶曽能也磨加羅須軻珥良
廼志呂久那良牟誉滿天毋
蓋此山萬々歳を經る嘉瑞を如此に禽鳥に示されしとかや烏の頭ふ白くなりしかバ山の名を守とし
その雅稱ありしとて今ハかくし
山上山下寂あらん時ハ三足の烏みな白くなるとの
知る事ありとておそれ

曙や雲より三羽の烏　自立　江戸 神叔

是非王ふねさつき闇路のかくれなき　呂茄

すれ違や今見つる春うすき烏崎　柳也



櫻小路

是より三成瀧水寺光明院と云昔ハ二百坊を領し寺有しか此小路入口より天拜坂と云下の方に有し能除太子天童をまつりし所也今ハ名計なり中仏也

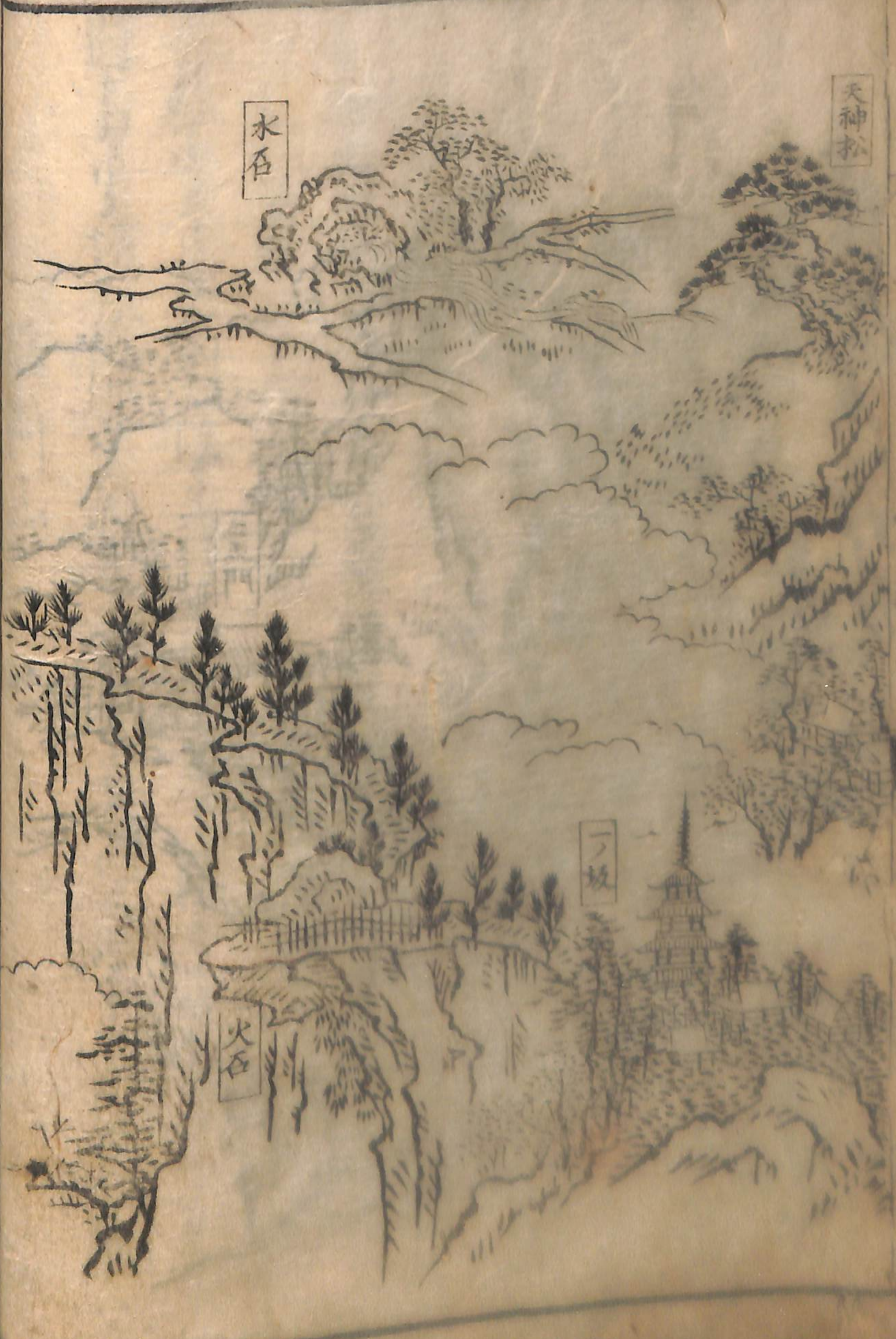
上雲町

古墓町とも云是より荒沢北方へゆく野径あり

下旬館

むかし下ハ光明院主住せし所ゆへ院主屋鋪とも云今ハ別当の黒坊屋鋪とも号す上下旬の事にかへ不出る

稲荷山



右より稲荷大明神と祝ひ崇むる山内の音也ありし所
必神告ありし事時々やいありしへまこの鳥高嶽なるを
見るとなんこれ澤追ひ思澤といふ

水の尾乃緑かくさかりかふらさき　呂茄

二王門

当此二王尊ハさるまし法湛道心といへる禅家乃徒権棟ハ
丹誠乃志願あるまゝなるにや一院を辞し此所に来り
居しくわまさの佛像を建立せんと発願し其の二王尊
も造営あり右の脇に小舎ありさるまし法関東より
牛を奉納して宮ハはるくきたる牛ハ湯殿権現の
使者なりとて昔より繪の絵ても納め来りしや

継子坂

むかしかゝる山中の子ある母なくして[illegible]
此ほとりに捨られたる子の童ハ追来る石にあたりて
足をそこねおりふしハ[illegible]
縁より山寺小子安地蔵なりと安置せる事となりにけり
誠に身の不幸なれとも[illegible]
悲しみれどもそれ哥を西行のまかる[illegible]
じなるゝ[illegible]
後世更に恐れ有

下坂や[illegible]　因縁乃花　介我
[illegible]や[illegible]　羽黒 其翠

それ母より[illegible]汁や[illegible]　李夕
[illegible]秋の蝉　山風
[illegible]花[illegible]の子坂　呂九
便[illegible]椿[illegible]草　李山
[illegible]木瓜の花　呂笳

白山宮

坂氏[illegible]
今ハ官廠[illegible]修験入峯[illegible]

猿川

[illegible]
湯殿[illegible]清水[illegible]

よりなれ近き世に至りてもし年々諸人身をよせ此みち

又は國家の禍を成就ありし荒和祓終年のたくはへ

名賢高緇しも此の門よりいくみをなしたるよし

ありしハ名付られ此より以て権現瑞籬の

内なれバ往昔の人々身心を清め登嶺をいとふて

右の方に瀧あり倶利伽羅不動の鋳像水中に立

のと瀧り落る飛泉ハ朱夏玄冬にして白布をかけし

あるさとし銀河の九天より落るを賦せしとかく

みゆるより六根清浄を

祓去凡塵淨有川　委波日影一繩金

金繩界道瑠璃地　瀑布垂幡千万尋

釈　實傳

次韻

人世塵垢茲祓川　心身潚洒淨如金

岩前仰視一條瀑　彷彿飛龍下百尋

釈　海秀

千首和歌に作を納むる附
右此山にて詠める

酒田　政盛

きよひ川瀬々の流も末とほく月の出羽の山や移して

水音もや秋をしぐ流るゝとしわかれ　素堂

栗笑んで不動の怒る深山かな　京　言水

嘘はなし涼しうれしや祓川　里風

欲垢のおちおち人や祓川　桃隣

草刈乃野麻のしん祓河　風水

清みうて新涼むすぶ禊かな　東水

身よ涼よ十丈ありく滝すゞ笑　羽黒よ村 洲水
雉ヵ浴衣積りほせぬ門涼しろ　親福
あさひ門白玉涼し　うら風垢離　令 旭堂
飾落し応り飛ぶ気比鉾もなし　令 梅露
月毎に粉て砕くなり滝は門　孤鶴
同じ音の霧の布不成さらぬ　幸信
捌らん星合の滝し　おちら滝川　南枝
流くだるふくむ宿なり宿の瀧　其翠
滝壺や岳可有て落く荷葉かし　李山
魚星乃身縫ひあまたらひ門　呉柳
後門や道着も難催し滝く地　幽窓

雉鳩の尾や水の移る根芹とハ　呂笳

不動堂

滝の中段よりすゑて尊容乃前にたちよりておがめば
僧侶時〱此下より経をそうするにや侍らん

念佛堂

和光山月桂院やうとて此法道此下に道をひらきて不
退乃念佛をとりおこなひしより人を極楽に身迎ら
るゝ二六八の悲願を乗し今ハ西方の宗判をもしれ
ぬんと貴くぞおぼえ侍る

道すくも念仏も只一宗の郷　沾徳
松乃戸や此市の庵の市なる秋　江戸 雁山

律院より登り来し　海棠菴　東水

八大堂

八大龍王の祠也一宇なりしを近く堂廡の模様無懸
床の彼のかゝる彫物をなして今の堂のかゝり相をなす
ちかく幾年来を経しかば之の處損ありしが堂より
しておのれより打て折く竜形の彫る事なども傳ふ
それ此山の權現と龍形の神秘に存じてまだ古人の
一説仰きしハ據て八大龍王の鎮護しかば此事實を
示しますやかて中くおもしく為こそ此の者く待候

五重塔

本尊ハ正觀音菩薩陲脇士ハ軍荼利（グンダリ）妙見の二尊也
天平年中平将門建立之といふ傳ハ朝敵叛逆の心
ともかゝる所法施をせられしを今いかで思ひ給ふ武蔵
國神田社ハ社家の説には大己貴命を崇めしといへど
林道春が神社考ハ此将門の靈を鎮メ祀りて
毎年正乃場の祭を起し悟する事跡因縁あらん從
可考

應永五年前駿河守藤原朝臣氏家再興之同六年
癸丑六月入佛供養時導師天台沙門觀學院尊藏
と古き記録にあるより塔の四方に法報應化乃
四字額あり小野道風の手跡といひ傳へり

高顯歎層雲幾層　層天無翼一飛樓　釈 實傳

朧々蒼佛覓斗牛際　四萬由旬俄望眸　禪光

次韻

孤巍宝塔至稜層　遥断大清隣月楼　令

一逕慇懃三拝立　堂中聖顔共青眸　羽黒 東月

今一重霞ひおそくはじめうれ　旅人

白雲より九輪のせそり山さめり　三角

學頭屋鋪

塔乃もと小あり羽黒代々れ学頭職ニ而そ住せり上小いふる教師ハ是験高徳れ僧ふらく男康嶋神社代兼帯せり六月十五日羽黒山乃祭祀ニ事畢りて又男鹿嶋の祭祀あり是をみれそその道程三十有里と隔きり

同日此内ニ役所あり飛行せりと云伝りその外天下太平年穀豊民祈雨於待竈池邊誦法華請雨等経三日之内法水霑地輪云々その外拳く祭へりし道智学是等の役僧は別に住居して又は荒町宝勝院に住せり

天神社

天満宮ハ常火数鳴れ所にあり来れり漕より向これ外峯小天神社にりまその外大日堂観音堂普賢堂等境内に並居り

護摩堂普賢堂

右あ社ハ之より二十余社の境内なり事多く略く

一ノ坂

普賢堂の前より八幡坂のぼりて石階六百七十間余
前代別当天宥法印寄附せらる此坂の右乃方秘密山路
といふ谷あり

大石

一此坂のなかばあり此石より西南方に当りて南野し
りに至り石清水とて氷石あり是より北出羽此二つの石
ともに古往今来詩に賦し歌に詠じ称せし石の
事は陰陽二氣の寄宿にして大石ハ陽徳の顕はし
森羅万象の萌をなす此徳を今にあらはし閲其の
庭より出る所の鎔(カツ)として煽とし出る事時にも清海
の船人はひとり此間路より来る事に於ける氷石ハ
又雨露の潤沢はつかさどり石中より冷く出る霊泉
を涌出しその流れをとして数万の民草を活しいのちる
早暑にも絶えて奇しく妙なる秘ある所ともいへり此の氷
石の流より下は玉河といふ所は陰二氣乃男石深山迷谷
と陽なる事是又この名にいる所の桐生の松乃ん信吾
の境地と隔なる土地乃姫ならしとあらずわが山の
ある陰徳陽報は此帰門石乃霧の行末深泥國
家のちり山上山下乃人法ちく退動なきらん事を示
し往通り往詣の生靈等同の香を是をなるべし
いさんや山内に居る下河もん信せしものや御のるなりや
鶴の園の英士柳原氏氷軒がこの石をば云鎮一吟を成

縁ちよ此山より遥る柳らしくハ社記古録等よ得かたう
甚深也奥ハ秘やまた不畏史れ云偏多るにもさらし小
おそれよふ心ぼとらぶ梅か石の橋と猿ん中の霞りハ

蛍やりまやかれ斧より石ぼらて　嵐雪

石れ出の影や飛ち所岩ぼくし　広人 喜運

雨水て縞ぼす乃根や梅かれ石　江戸 倫水

猫書より郭社れ乳やふうら石　羽黒 孤鴟

苔漏る漏れ稲ぼ屋山や石に濃るる　令 不及

わするぶる小山き摑れり梅かれ石　李山

出ぐまし氷れ中おぼ小源し　義哉（アナニエヤ）此紅

石ハ寝く韻猟く清水　ごう卿 梨水

雲踏つる峯や山高き此物うつ川　石筋

二ノ坂

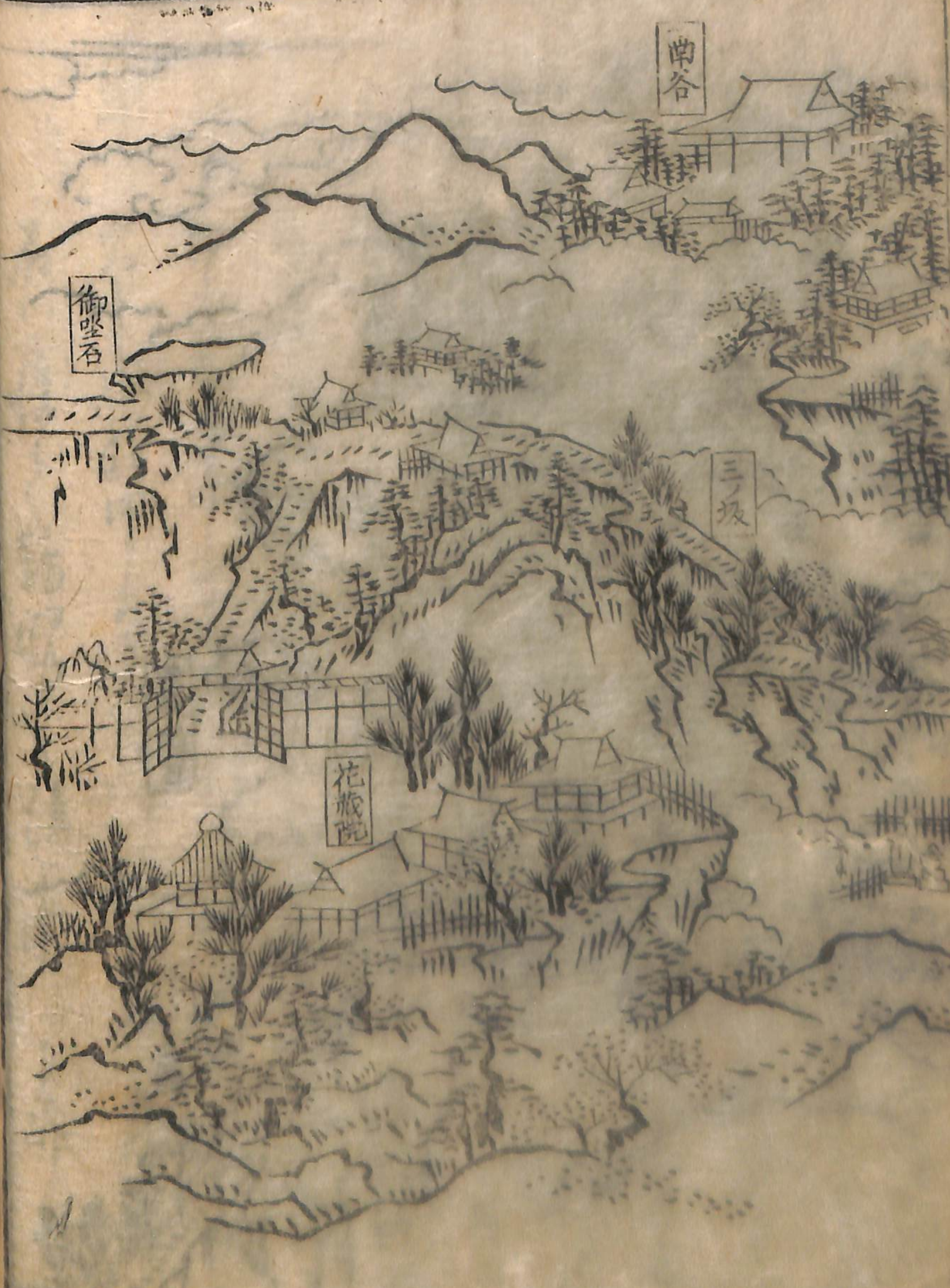
此坂の上茂酒売屋もあり此所を休み坂といふ

長嶺杉（タケクラベ）

二ツとも高き杉乃茶やさん枝さへ等しくならびこれを渓間
又桐生此杉ありて是此杉植れば又谷の杉さけとなる
こゝまてはいふ所此木の樹のしろき乃川辺そ
女わらべ此ちいさき石拾ひ積かさね乃至童子戯
聚砂為仏塔可思可感

杉の木の涼しさや　石たゝは光　江戸 銀葉

いさゝや錫杖ふれば蝉のこゑ　山風



別当へ着する道者ハ此下にて経木等を建つ

地蔵堂

山王宮

此宮中ごろ廃壊なりしをいさゝか東叡峯
の願王院主台宗擁護の神なれバ再営ありて座にし
て朱丹玉垣ふたゝび輝き永く台家傳燈の守
となしたまひぬ

伊弉諾山

若一王寺と号して伊弉諾伊弉冊の二神を宗としてまつる
まつる本社ハいはほを石として大なる巌あり往来の人
より西の方にあたる弥生乃陀る山本校と称す

香芬郁より

梅より月桃そとが宿れ　殿なりしぞ　東水

むかしハ伊ざなきの石の座まそらに　羽黒 覧水

若王寺

此寺ハ世々一山貫主職を掌りて法園教化の末流を撿
断す寺山の號とハ伊弉諾山若王寺宝前に伝へる
当時東武輪王寺乃宮の御支配にして繁栄近年門
前に蓮池ありて伊弉諾天宮あり又霊仏秘宝乗
由の著に高教の年は積りてたやすく記しがたしけるぞ
のちハ山よりのぼるは天宥法印此下の後をつぎて
天宥師乃筆に五十世の別当にしてその背の尤も見る

もとむ一山の標準これ附りまてる芭蕉翁行脚のよし
手向せし文を乞て

芭蕉庵桃青拜

羽黒山別當執行不分叟天宥法印ハ行法いみじくして
こゝろふかく止觀圓覺の法智才用人に施しく
あるひハ山を穿ち石を割て巨靈の力女媧がたくみ
をこらして坊舎を築き階を作り流るゝ青雲の滴を
うけて筧の水をとゞく先づ名石の異木の工み四山
乃奇物として珍しき物多し一山峯々その名を慕ひ
その徳をあふぎ尚とふとびて羽山開基と
等しされどもいかなる天災かなせるけむ伊
豆の國八重の潮風に身をはふらかして波の露
きの名をさへとゞめけん若侍るよしやあの事は察(サツ)しこゝに
山院礼の席(テ)追悼一句をすゝめられし門徒等志あり
に動かされ侍りけれはそゞろに戯言一句をつらね
て香の縁として向侍る僕かさ事小なん侍る

その玉や羽黒にかへす法の月

年ハ元禄二年のけふなん翁行脚の折から圖司呂九
を宿として別當代會覺阿闍梨に謁(エツ)し南谷別院
に舎(ヤド)して憐愍の情こまやかなるあるじせらる

有難や雪を薫らす風の音　芭蕉

すむ程人のむすぶか夏艸　呂九

此時此一巻ハ其角か序摘て抜粋を會覺阿闍梨に奠

瀧閑谷は東く方便りて猪しは呂丸もて亡人をなぐさて京
えのことはなり候ら事ハ都のおもひ出る一際なり
なりけるかり省略して

一 此寺住職の比
良辰は緑なり　僧正徹海

いやさびしく今宵は月を旅の夜思ひいで相は奥の山寺　(一)

寺こそ林猿(サハラ)のくまは口おもしき　湖春

施餓鬼の夜ぞそこに浮猪は音　浮生

まくそられや灯中の岸の花ぞかり　(秋) 白鉄

文覚ノ淵

此淵義王寺より少し谷あひ入りてその山を高雄
のと人青山より登りて此下にしも数日成送り権現乃
冥威冥王は加持し給へる由旧記に見えて候事に霊験あらたなり

淵尊や蝉乃なぐれは何の洛外　此紅

日中も桜てり照りぬる陰(カゲ)かれ　立宇

西行戻(モドリ)

西行法師登山の事古記に見えたり戦場にて西行ら
餘波の桜多しありその折しもは此下に来りたまひ
捨てありいかなる故の侍りしが此下にて童師に合ひて
此所を申すにて西行桜といへる一本のありけるを
枯れしを見しは昨年の名残のことなりけるぞいふ

山路経序あてちるや菊まどのさ草　(抜) 嵐雪

車もけなり出て角のつくる津ふり　氷花

風

南谷

この所へよる石は南より三町ばかり行て寺あり紫雲
寺と号す則三山修行者の寄所なり上古は三長吏五
坊迄院主職学頭職長士職なといへる職分は諸さ多
なりけるよし今は此職分のみ存せりまの事れ下ちつ
紫苑ある谷地とよぶあり淳水をいふ池ありこれのとも伊勢
国五十鈴川の蛙よりは声ひくく婦の声のまる事によりいかなり
の小蛙うける事の様り侍れどもいかなる故にや古
より此戸隠の山と云わたる延宝年中のころ冬の月
蛙の鳴けるよし時の人奇なりとせしを後伊勢の
十鈴川の蛙は声ひくく鳴けるよし後世の人語りけり

とかん

反魂梅發薫南谷　南谷活春萬國新　實傳
楓葉秋來好花好　風光又愛好於春

次韻

南谷地靈人又傑　宛然常愛物尤新　海秀
櫻桃開盡楓林錦　富貴風流秋與春

冥加あらせ給へ古塔の種乃まわ　呂丸

水まさらは隠れもしらず南谷　桃隣

笠やねる千本のけむりし　東水

出見世おもく底の摘ありかなり　此紅

遊びやまの邊にとうね茶の匂ひ　李山

ゑみちる峯や本尊ながらくずる雨ふに　梨水

こゝろ月や氷きえけり鐸の音　不及

音る峯人泊るゝれ朴ちる　呂茄

榛や標りおしうぬ小春れ行　山颯

はいば麻と背にもゝや花ちるさこ　其翠

奇岩より立ちれつんくり鶴ぼ花　庭水

三ノ坂

坂は上れど八幡宮あり左に九日流鏑馬は神事なり
但は由縁これありといへども略して宝前にありは闕ぬ八
まん坂といふ

跡ふかし〱綺りつく駒のせかぐる雨　立志

袖拭ふく汗や蝉なれぬく　雲濤　此紅

されどこゝそ掃はきつれ〱嶋れ礼　久武

壇所院　善臺院　圓珠院　玄陽院　儀本院　福乘院

般若院　今改号三學院 地藏堂アリ　右三十余院の内なり事ハ大略す

花藏院

羽黒山中大先達の一寺なり是宝幢寺の寺ハ皆白ヒて開
基已来錢宝霜有積りん寺院のうち霊宝政家等詳
りちこしがたし当住侶清海師より此院の規模あつて
中興ともいふべき大建立なり此院の外一山の勧学
それ勲功他ふり殊なるの事あり〱如書にあり〱るきを雅の是
とりさまん於中近歳造建大寺院乃宝前南東方出丈

餘山岩石土形如高字是辨天社種字也ゆゑに種字本社
のうしろ辨天堂の上より冷水涌出して此辨字の
ありまる岩奇異なりかくして穿井その水をくわへて清
浄なること如耳露妙藥是豈天女之感應不甚深乎
右福寿水又呼耳露泉　此所の絶景島海は向ふに
寂上門源しく浪のよく船より心の(?)の寺の湯の月山
乾元亀の詩まであふりかへり西へ下れば村里をへて
きわ字多なり

芸帆行帆自(?)る人はまづさの船　無倫

浦なるべいまきはけ船もしまるれ　康東水

山眉は花よすゞしきこうらん　門久武

景よりあり貝はさがみて泥すゞみの船　鶴岡水軒

酒涼しけりの海は水　陀(?)の那　今紫片

右三千金(?)のうちの山は絶りなかりびいり

宝徳院　南陽院　能林院

能除太子御坐石

往昔能除太子登嶺の折からまづこの岩屋に修行し給ひ
所御勝を撰られ久しく居給ひしとなん鶴(?)能
除院は此内にありてたびの旅にたゞ此石
にて人々往還は貴賤拝しける事おびたゞしく盛なり云
太子昇天はよりの(?)るゝ御跡皆のこる事は不思議なり
さるゆゑによく名付侍るとかや

苺茂むすそのハ石も皆青たゝミ　水軒

立よ消し風こそそめし若の花　且松

千載此所やうまれ石も霜　立宇

十五童坂

登れ此坂あり弁天堂のあとなれバかくれなけれバ待るまや修行屋浦しるかあの要えうしけりと

下花表

辨天堂

此之堂古よりの堂にして権現本社の堂番此勤む弁天乃擁護此不思議経読り讃歎するのたゞし此弁天の奇特ハ猶くあることよしし畧く

能除崇

太子此御山の要説給くまれしつとの中の正説此いるく舊記曰崇峻天皇第三王子一名参拂理依形貌醜為暮荒相放北海濱然太子直歸佛門詣而師于聖徳太子次離髪染衣焉法名弘海心性勇猛備有凌雲志且離京域撲遼濱往攀羽山修捨身行住阿久谷三秋衣以藤皮食以樹果平日無他辟特信般若經力誦能除一切苦之文又誦能所一切空之文故時俗呼曰能除仙とおりふり此時蘇我馬子謀弑天皇事見帝王略記等故太子出奔于又曰人王三十代欽明帝御宇至崇峻帝王子参拂理依天童之誥至羽州時片羽八尺霊烏飛來而導登于羽峰拜本

身観世音菩薩時讃曰善哉聖者修勇猛行一身善業
普利于他當感見弥陀大日所居土則化成霊鳥蜚揚月山
及湯殿山且虚空詰曰我是羽黒神社也永欲使汝興吾山
即授三面宝火珠云々太子此宝の珠を以て自ら嬢ひて時
不動明王自體放瑞光かゞやき之則清浄常に大日之なり
今此世にいたるまで湯殿行者これ常に此れを用ひられば登
嶺難叶けれ常に大堂の下より奥より戴きて月山湯殿登
巖これより此奇瑞役下より拝みしを故略ス太子山中より遙
建でる所此寺院若干なり山中に有り

羽黒山寂光寺　堂塔山瀧水寺　南滝山禅定寺
来光山千勝寺　下居山中禅寺　醫王山機乗寺
不動山嘉祥寺　漆門山那我寺　金色山福王寺
荒澤山廣澤寺　此外数多有りといへどもあまりは
略すその外にはばかる一尺六寸の彩像を刻し安置し
給ふ今に有り侍るとぞ

太子在世霊験廣大なる中にある時太子山居安居の折
から近里に疫病流行し貌中の門縣注ニ妹まで三年
腰脚痛みより故に頻りに太子の高徳得たり是非山
崖より請して則太子行らんとする日役縣主の屋宅より
火出て悉く焼亡して病者もおそれて走り出て大に
周ねられたるに太子引とめられその屋宇なく
痛む事なく病者も頓て愈へ腰脚おのづから堅康

なり是則能除一切苦の経力般若の智なりといへり病
患速疾に焼亡を除しなん関くれて貴賤是を崇
めしそれ功いよいよしるし
上件の事ハ旧記乃趣意にして猶ミ筆を略議し
太子の事ハ遍く世に知らず殊りたる事の役
是又其宗旨なれバ依て當山五十世の別当天宥師の當
時貴樹院宥海ハ水無瀬中納言殿の御息なりしを
は太子の御筆禁中記録所にて拝を給へりし
を法文通ありしに則水無瀬殿の有職法師にて
なれバいかにもし崇峻帝の皇子より御し法の返書下りける
なりけり法にいたりて法身の遠隆よろしく思ひのまゝに編

出家拝辭れわさしといへりけり或議曰往昔奥羽俗逆蝦夷
勇押羌奴抗王師事所載史傳可見吾能除獨開山發驅
猛獣而後蒼生得安遂使之領西天法味長為朝廷之藩
屏且奥羽俗識大権現為地能佐信之三州共洛其化者多
焉奥羽諸侯東征都督皆先致幣帛於此山若怠則危云
此能除堂ありて一世別行の上人ハ此色を垂給ふ
金剛佛子阿闍梨弘俊尊法坊権古帝の勅にして始
て執行の位より住ミ侍り已来今の世乃上人是此堂
承りて黄ハ金にして戴きて此故實なりけるの盛山城
法印永忠筆の秘書あるを
未来記や法を手に得る此菊の山　東水

花守や行者のふれかゝるまへ　呂笳

ふより記せる上人号は寺を覚樹院殿より水尾流の
導師はゆるされしなりとや此宥海法印は寺は来歴を
の法天宥禅師弟の法契約して同じ年午の五月
山へ法印つまみて峰中修行せしむる於いて院にい
者より峯より榜らせ給ひける往縁をおのれ甚しく
布く佛法繁昌いたる霊鳥鳴かるゝ此峯はさる
類ひなき霊なるとぞ高野乃通念集すと申侍り
かの奇事筆者の序よりも志らしめおもてられ
これ法家山門修学経典て此山へ文くだり侍りける
とは天宥師と聊か法中達ひける事やまらん寛永

峯中二十六歳すらく一万里はかりとなる世のし
なるを好むもの入でいる道世中へ仏のかふの法
坊舎は一間より一貫取かしらん

神輿堂

わかれ花のとあるきをいかく化るむせるゆり

三山権現乃法奥は此堂にあり毎歳六月十五日は法
祭祀の時出なさる

大柴灯石壇

天下国家五穀豊登は祠として執行職先達職是法
修行せる事あり柴灯大柴灯乃事は越の下小粗
志めを峯中の行事として秘事なれば略く執

行職家定の時於開山堂大饗あり

御影堂

當山別當執行四十八世宥源四十九世宥俊二代の法懇
願ひて最上出羽守源義光乃依信願あり元和年
中より宥俊造建